

## 中野拓哉作 「卒業旅行」

< 前編 >

- (音楽) 「蛍の光」
- (全員) (教室のガヤ)(口々に)「おい、あいつ、国立あきらめたんだって。」「わたし、春から女子大生なんだから。」「おれなんか、暗ーい浪人生活だぜ。」など。
- 岩田康夫 おい寛、結局卒業旅行に行くの何人くらいだ？
- 宮本寛 うん。男が3人、女が3人の計6人てとこだな。お前も行けんのか？
- 康夫 おお、モチ。
- 寛 それじゃ7人だ。
- 先生 えー、これでみんなともお別れです。進学や就職、あるいは浪人と、それぞれ旅立っていくわけですが、この3年間、皆と一緒に培ってきたものを忘れないで。いつでもまた遊びに来てください。卒業おめでとう。みんな元気で。
- (全員) 3年間、お世話になりました。先生もお元気で。
- 康夫ナレーション おれの名前は岩田康夫。青春高校3年、いや、今日の卒業式で、高校生活には別れを告げ、春からは社会人1年生だ。クラスのほとんどは大学に進学だけど、おれは家のこともあって就職する。みんな別れ別れになるんだ。そこで高校生活最後の思い出に、みんなで卒業旅行のスキーに行くことになった。
- 康夫 お前、スキーの板持ってたっけ？
- 寛 うん、兄貴のだけどね。
- 男子A 岩田はスキーうまいんだろ？
- 男子B 小さいころからおやじさんとよく行ってたんだよな。
- 寛 (声を殺して)バカ！ おやじのことは言うな！
- ナレーション そう言って気遣ってくれたのは、宮本寛。3年間、一緒のクラスでやってきた親友だ。彼も大学へ進学する。
- 康夫 いいよ、気にしてねえから。うん、そうだなあ。そんなにうまかねえけど、小学校1、2年生くらいからやってっから、スキー歴は10年以上ってとこかな。
- 溝口恵子 そうなのー。わたし、教えてもらおうっと。
- ナレーション …と、一人で決め込んだのは、溝口恵子。小学校も同じクラスで、共通の思い出も多い。クリスチャンだとかで、教会で何か特別な行事があると、しつこく誘うのが玉に瑕だけど、気の置けないいいやつだ。
- 女C わたし、初めてなの。何だかスキーって壊そうだし、憂うつ。あんましやりたくないよなあ。
- 女D どっちかって言うと、温泉のほうが楽しみ。露天ぶろだったりして。
- 男A ババくせえこと言ってんじゃねえよ。それに、そんなこと言ってるやつに限って、

スキーが病みつきになるんだぜ。(笑う)

恵子 じゃあね。火曜日、7時に駅で！

(全員) (口々に)「じゃあね。」「遅れんなよー。」など。

寛 おい岩田！

康夫 ン？ 何だよ。

寛 お前のこと、無理に誘っちゃったけど、お母さんの病気のこともあるし、それに...、お前んちは...

康夫 お金のこと言ってんのか？ 大丈夫、お前らが受験勉強してる時に、バイトしてたから。それに、おふくろだって最近調子いいって言ってたし、もうみんなともそうそう会えなくなるからって、大賛成してくれたんだ。

寛 ならいいけど。

康夫 心配しなさんな！ それよりお前のほうこそ、遅れんなよな！ それじゃ。

寛 ああ。

康夫モノローグ 寛はいいやつなんだけど、ちと心配性すぎるなあ。でもああは言ったものの、おふくろを独りにはしたくないはなあ。クッソー、おやじさえいてくれたら。

ナレーション おれのおやじは、おれが中2の時、勤め先の建設現場の事故で死んだ。一人っ子のおれを、母は「高校くらいは」と言って、無理をして高校に入れてくれた。しかし、その無理がたたってか、1年前に軽い脳血栓で倒れて、1か月前に退院したばかりだった。おれは母に楽をさせてやりたかった。だから就職することにしたのだ。それに金さえ手に入れば、自分も好きなことができる。今のおれには、ただ自分を信じていくしかなかった。「大学なんか行けなくても平気だ。一人で何でもやってやる。そしてやつらより4年も早く立派に自立してみせる。」おれはそう心に誓ったのだった。

(音楽) (軽快な感じ)

ナレーション 5日後、おれたちは白銀の世界のまっただなかにいた。宿に腰を落ち着ける間もなく...

男子 B (口ずさむ) 山は白銀...<sup>しろがね</sup>

恵子 あんた、ジジ臭いわねえ。

男子 A でも東京から2時間とかからずに、こんなところまで来ちまうんだからなあ。「トンネルを抜けると、そこは...」ってやつか。

女子 D うー寒い！ 早く温泉に入ろうよ。

康夫 みんな、グズグズしてないで、さっさと滑りに行くぞ。

女子 C やっぱわたし、ここで部屋暖めておくわ。

康夫 何言ってんだよ。はるばるここまで何しに来たんだ？ ほら行くぞ。

男子 B まあ、さっき着いたばかりなんだから、少しゆっくりしようぜ。

康夫 ならおれ一人で行く。

寛 ま、待てよ、岩田。せっかくみんなで来たんだから。

男子 A ったく、あいつ、いつも自分勝手なんだから。

ナレーション 結局、一人また一人としぶしぶ追っかけてきて、全員で滑り出した。それから 1 時間後、おれたちは大自然の中で、何もかも忘れてスキーに熱中していた。

女子 ギャー！

男子 (口々に)「ヘタクソ！」(笑い)

康夫 いいか、スキーで大切なのは、スピードコントロールとバランスだからな。それじゃ始めにスキーを「ハの字」に開いて、スピードコントロール。遅ければヒザの力を抜く。速すぎたら力を入れるんだ。それでどうしても止まらないときは、オシリから転ぶんだぞ。

女子 C えー、そんなのやだ！

寛 スキーは転べば転んだだけうまくなるんだよ。

男子 A 寛。お前もやったことあんのかよ。

寛 ああ。まだ 5、6 回だけだね。

男子 B 康夫。能書きはいいから、見本見せろよ。

恵子 うん、そうよ。わたしも見たいわ。

(全員) (口々に)「そうだそうだ」「やってみせろよ」等。

康夫 分かったよ。じゃ行くぞ。あそこの木が 2 本立ってるところで待ってるからな。それ！

男子 B あいつ、うめえな。さすがに言うだけのことはあるぜ。

恵子 ほんと上手ね。雪煙なんかほとんど立てないし、それにシュプールがきれいだよ。プロみたい。

寛 おい、あいつ、コケて新雪に突っ込んだぞ(笑う)。

男子 A 猿も木から落ちるってどこか。

(全員) (笑い)

寛 ようし、おれも行くぞ。それ！

男子 B おい、寛のやつも結構うまいじゃん。やるなあ。

男子 C そうねえ。

男子 A ようし、おれも行くぞ。

恵子 わたしも負けてらんない。

男子 B おれもだ。

女子 d わあ、みんな待ってえ。わたし初めてなのよ、ねえ、待ってたらア！ キャー！

ナレーション 日が半分傾いてきたころには、コーチをしてあげた恵子もかなり滑れるようになっていた。おれは、心地よい風をほほに受けながら、彼女と一息入れた。

恵子 ねえねえ、あれ何？

康夫 あれは... ウサギの足跡だよ。この辺りは... ほら、あれあれ。

恵子 わっ。あれはリス？

康夫 うん、多分ね。この辺は野生の小動物が結構いてね。前に野ウサギを食べたこともあるんだ。モツみたいな手ごたえがあって、結構おいしいんだ。

恵子 へえー。ねえ岩田君、あれは？

康夫 あれは“ヤドリギ”って言って、木の実やなんかを食べた鳥が、ああいう高い木の枝なんかにフンをするんだ。そんでそのフンの中の種が目を出して、その木の枝に根を生やす。そして元の木の栄養分を吸って育っていく。するとあんな鳥の巣の骨組みみたいなのができるんだ。場合によっちゃ元の木が枯れてしまうこともあるんだ。

恵子 岩田君で何でも知ってるのね。だれから聞いたの？

康夫 昔、おやじが話してくれた。

恵子 岩田君のお父さんてスキーもうまいんでしょ？ いいな、男親と息子のそういう関係。

康夫 (強い口調で) いいもんか！ あんなおやじ、おれとおふくろを残して死んじまいやがってよ。

恵子 ごめん。そうだったの。ほら、中学の3年間、父の仕事でよその町に行ってたでしょ。だから知らなかった。

康夫 いいさ。ただ、みんなに同情されたりすんの、すっごくイヤだったから、あまり人には言いたくなかったんだ。

恵子 そう。じゃあお母さんは大変でしょうね。

康夫 おふくろは1年前から入退院の繰り返しさ。

恵子 そうだったの。だから岩田君は就職するんだ。“うちのクラスじゃトップクラスの成績なのに”っていつも思ってたんだ。

康夫 別に大学だけが人生じゃないよ。それに、親のスネかじって甘えているやつらと、これ以上一緒にいたって何の得にもならない。それより自立して、自由に暮らすほうがよっぽどいいと思う。おやじが借金抱えて死んで、おふくろも病気がち。結局頼るのは自分だけってことになるかな。

恵子 そうかな。そんなことないんじゃない？

康夫 でもおやじが死んだ時も、おふくろが倒れた時も、親せきのやつらまでが知らんぶり！ 世の中なんて、結局そんなもんさ。信じられるのは自分だけだよ。

恵子 岩田君、つらかったのは分かるけど、でもそれじゃあんまり寂しすぎない？ 岩田君が、自分の力で、自立して生きていくっていうのは立派だと思う。でも、だからだれも信用しない、頼らないっていうのは違うんじゃないかな。どうして友達を信頼できないの？ 自分で心を閉ざしたら、だれも岩田君を助けることはできないわよ。

康夫 お前はどうかんだ？ 転校先でいじめられて、死にたいほど人嫌いになったって、

いつか言ってたじゃないか。

恵子 うん、それでね、わたし、教会に行って、イエス様に会ったのよ。

康夫 おっと、そこで「イエス様」か。また「今日の日曜、教会に來い」なんて言うなよな。

恵子 (笑い)言わないわ。でもね、岩田君、これだけは覚えてて。イエス様は、どんな時でも、わたしたちに真実なお方だってこと。ご自分の命を捨てて愛してくださったのよ。岩田君のこれまでのつらさや、心のいらだちも、イエス様はすべて分かってくれる。だから...

男子B (かぶさって)おーい、岩田！ もうすぐリフト止まっちゃうぞ。

康夫 オー、今行く！ 溝口、その話はまたいつか。じゃな！

ナレーション いつもない真剣なまなざしの恵子を振り切るように、おれは夕日の沈みかけたゲレンデに飛び出していった。だが、最後のひと滑りをしている間、なぜかおれの心には恵子の一言がこだましていた。

恵子 (エコー)イエス様は、どんな時でも、真実なお方よ。真実なお方よ...

<後編>

ナレーション おれの名前は岩田康夫。高校の卒業式を終えたあと、それぞれの道に旅立つみんなとの思い出に、仲間内だけのスキー旅行に出た。その1日目の夜のことであった。

男子B なあ、高校生活もこの旅行で終わりだし、今晚は語り入れようぜ。

寛 みんな、腹を割って話そうな。

ナレーション そう言ってみんなで語り合いが始まり、そのうち、自分たちのこれからの進路について話し出した。

男子A 恵子は確か、短大だよな。春から女子大生か。

恵子 あら、そう言うあんただって大学生じゃない？

男子A あんまし行きたくねえよ。最後の最後にやっと引っかけたって感じだもんなあ。

男子B なあに言ってんだよ。お前らなんかいいほうだぜ。おれなんか、行きたくもない予備校しか行けないんだ。遊びの「あ」の字もない、暗ーい生活が始まるんだからな。

寛 何言ってんだよ。すでにこうして遊びに来てんじゃねえか。それにお前が、本当に暗ーい生活、送れんのかよ。

女子C そうよねえ。今年だって、「おれは受験生だー」って言いながら、それを一番楽しんでたんじゃないの？

男子B そうだっけ？ (笑う)

康夫 みんなはどうしてそう「大学、大学」って言うんだ？ 大学入って何したいんだ？

男子A おれは、まあ遊ぶためっていったところかな。今までの、勉強に明け暮れた灰色の3年間を取り返さなきゃよ。面接じゃ、「社会を正しく見るため」とか、「自分の学びを深めたいから」とか言ってたけどね。

女子C わたしは、まあ花嫁修業の一つっていったところかな。

女子d わたしも。最近見合いでも女のほうの学歴が結構重要なんで。

男子B へえ。おれはやっぱいい会社に入りたいからな。ま、受かってから考えるよ。寛、お前はどうかだよ。確か社会福祉学部ばっか受けてたみたいだけど。

寛 ああ。高校入ったところからずっと考えてたんだよ。経済大国の日本が、政治、特に福祉とかいうことになると、途端に三流四流になる。そういうことにもっと国が力を入れるべきなんだ。それにはまず福祉を知らなくちゃと思ってね。

男子A ふーん。意外とまじめだな。康夫、お前は就職だけど、何でだ？

男子B そうだよ。成績だってトップクラスだったし。

ナレーション その時、おれの胸の中に長い間わだかまっていたものが、一気に口をついて出た。

康夫 お前らみたいになりたくなかったからさ。親のスネかじって大学なんか行っても、社会には何の役にも立たないしな。お前らはまだまだ甘いんだよ。

寛 岩田、そりゃ言いすぎだぞ。

康夫 この際だから言わせてもらうけど、それじゃいつまでたっても自立できないんじゃないか？自分で道を開こう、自分一人で生きていくって考えなきゃダメだ。結局最後に頼れるのは自分だけだろ？おれは、おれしか信じない。ほかに何を頼る？ほかに何を信じるってんだ。

恵子 そうかなあ。それは裏を返せば自己中心ってことにならない？

康夫 (かぶせるように)おれはおれ、お前はお前、違うか？好く中Rズ、みんなわがままじゃねえか。友達とか友情とか、結局は見せ掛けなんじゃねえのか？

男子A 何だと？自分が先に社会に出るからって、偉そうなこと言うんじゃないよ！

康夫 何？もう一遍言ってみろ。

(全員) (口々に)「この野郎！」「おい、やめろよ」「キャー、やめて！」

ナレーション その夜、床に入ってから、おれは無性に惨めだった。翌朝、そんな思いを振り払うように、おれはみんなと一言も交わさず、宿を抜け出すと、独りでゲレンデを滑り始めた。その時だった。

康夫 うわあ！

盲人 (ほぼ同時に)あー！

康夫 痛ってえ！

盲人 すみません。

康夫モノローグ 全くこいつ、どこ見て滑ってたんだよ。

盲人の妻 すみません。大丈夫ですか？



康夫 え、ええ。  
盲人 すみません。わたしは目が全く見えないんです。人に指示してもらってやっと滑れるんですよ。

妻 すみません。ちょっと見失った時に…。  
康夫 あ、いや、大丈夫ですよ。

ナレーション 驚いた。目が見えないのに滑っていたのだ。それも、相当うまかった。そしてスキーをだれよりも楽しんでいた。おれは自分の目が信じられなかった。そして、夕方、宿に帰った時のことだった。

盲人 あの、すみませんが、トイレはどちらでしょうか？  
康夫 あそこにありますよ。  
盲人 わたし、目が見えないもので…。  
ナレーション 振り返ってみた。すると、スキー場で会ったあの人だった。  
康夫 あ、さっきの…。  
盲人 ああ、あなたですか。先ほどはすみませんでした。  
ナレーション おれは、その人を部屋まで送ろうと思い、ロビーで腰を下ろすと話し始めた。  
康夫 見えなくても滑れるんですね。  
盲人 ええ。あの、わたしと一緒に滑っていたのが家内でした。彼女がトランシーバーでわたしに「右だ」「左だ」って教えてくれるんです。

康夫 怖くないですか？  
盲人 ええ。家内を信頼してますから。まあ、時々さっきみたいにぶつかったりしますが、ど(笑い)。

康夫 スキーは長いんですか？  
盲人 43歳で始めて、今年で8年目になりますかねえ。わたしは小さいころから目が悪く、<sup>はたち</sup>二十歳を過ぎたころから視力がだんだん落ちてきて、30の時には光を感じるのがやっとでした。このままではダメだと思い、何か新しいことに挑戦しようと思ってスキーを始めたんです。「四十の手習い」としてここです。もちろん一人じゃ無理ですから付き添いが要る。

康夫 それを買って出たのが奥さんですか。  
盲人 ええ。それが縁で、わたしたちは結婚したんです。それ以来、かないには文字どおりベッタリ、頭が上がりません(笑い)。

康夫 でも、ほんとにスキーお上手ですね。目がご不自由なんてとても信じられない。  
盲人 ええ。わたしも、初めて滑れた時は本当にうれしかった。でもね、それにも増して、わたしは、目が見えなくなって初めて分かったことがあるんです。「だれかに頼るのもすばらしいことなんだ」と。若いころのわたしは、本当に人と妥協することを知らない利己主義者でね。勤め先も3度も変わりました。だから、失明した時には、もう生きてるのはイヤになりました。それが、家内と出会って、少しずつ

つ変えられたんです。クリスチャンなんですけどね、彼女のお陰でわたしも人生に夢と希望を持てるようになりましたよ。独りじゃないんだってね。今は障害者のための運動施設を造ろうと思っています。国が半分負担してくれるというんですが、それでも1億円近くかかるんです。でもわたしはきっと造ろうと思っています。

ナレーション ショックだった。こんな人がいる…。自分は今までいきがって空威張りをしていただけなんじゃないか？ 自分一人、生活の苦勞をして、進学できない悔しさや、無意識の劣等感を、進学していく仲間への軽べつ感や、自分だけが社会人になるという優越感に摩り替えて、独りで突っ張っていただけじゃないのか？ 本当の自立とは一体なんなんだろう…。

盲人 ところで今日は、お友達は？

康夫 実は、おれ、ゆうべ…。

ナレーション おれは、この人に、自分お心のありのままを聞いてもらいたい衝動に駆られて、ゆうべの事から始めてすべてを話した。

盲人 …そうだったんですか。もっとみんなを信じてあげてください。あなたの悩みを隠さず、真剣に打ち明けてみたらどうですか？ きっとみんな、真剣に考えてくれると思いますよ。人は、どんなに強がっても、独りで生きていくことはできません。頼り、頼られて、支え合って生きていく、それが家族であり、仲間じゃないですか。本当に強い人というのは、自分の弱みを人に見せられる人のことを言うんだと思いますよ。それじゃ、また。

ナレーション そう言って、その人は、手探りで部屋に帰っていった。おれはその夜、みんなのいる部屋に、勇気を持って入っていった。

康夫 みんな、ごめん。あんなこと言って。みんなそれぞれ悩み抱えたり、それぞれが選んだ道なのに。おれ一人が、なんか悲劇を背負っているような気がしていたんだ。

男子A おれのほうこそ、ついカーっとなっちゃって。

康夫 実は…。

ナレーション おれは、さっき会った盲人のスキーヤーのことをみんなに話した。

女子C へえ。そういう人もいるんだ。

女子D ねえねえ、それじゃ早速岩田君の悩みとやらを聞こうじゃないの。

男子B そうだな。康夫が終わったらほかのやつも、どんどん腹割って話ししようぜ。

康夫 うん、そうだな。そうしよう。ではおれからだな。おれ、本当は学校の先生になりたかったんだ。でも、おふくろのこととか、お金のこととかで、大学はあきらめたんだ。

女子C へえ、岩田君で教職志望なんだ。初めて聞いた。

寛 それで？



康夫                   でも、さっきの人みたいに、夢を持ち続けていたいんだ。あきらめたくないんだよ。

寛                      なら来年、夜学を受ければいい。そうすれば、働きながら大学に行けるし、教職課程だって取れるんだぜ。

男子 A                でも、結構大変だぞ、それ。中途半端な気持ちじゃ卒業すらできねえよ。

恵子                   でも岩田君ならできるよ。頑張ってみなよ。

康夫                   ありがとう。そっか、働きながら夜学か…。やってみるよ。

ナレーション        その時、おれの心の中のわだかまりは消えていた。おれが心の壁を取り去った時、まるでせきを切ったように、口々に励ましてくれた、あの夜の仲間の言葉の温かさを、おれは決して忘れない。

                          帰りの電車の中で、すべり疲れたみんなはぐっすり眠っていた。

恵子                   岩田君。今度の旅行、よかったね。この 3 年間、ずーっとあなたのこと祈ってたんだけど、やっと最後の最後にイエス様が聞いてくれたかなって気がする。

康夫                   イエス様、か。…そうかもな。お前の言うとおりの、そのイエス様が真実な方なら、本気になって求めていく価値はあるかもしれない。

恵子                   そうよ、岩田君。それは決してヤワな生き方じゃない。イエス様に在って、本当の自立が始まるんだと思う。これからわたしたちみんな、それぞれ別の道を行くでしょ。岩田君とも離れ離れ。正直言って寂しいけど、でもイエス様に在るとき、わたしたちは、いつでもどこでも一緒よ。

康夫                   そうか…。そうだな。

ナレーション        おれは、自分に言い聞かせるように、そうつぶやくと、恵子を見た。その顔が、ヤケにまぶしかった。窓からは、おれたちの行く手を示すかのように、一面に広がる雪景色がキラキラと輝いていた。

< 完 >